

幼児教育の聖域

太田 次郎

先日、幼稚園の卒園式に出席した。盛装した子どもたちは、園長先生の手から証書を一人ずつ受けとっていき、あどけない顔で、おじぎする姿は、何ともかわいらしく、ほほえましかった。

あのような姿を見ていると、この子たちが今の偏差値社会へしだいに入っていかざるを得ない現実を何とかしなければと思いたくなる。

その話を友人にしたら、彼は「妙な感傷に走るな。あの姿だって表面的なもので、もういろいろ始まっているよ」と、さめた答えをした。確かに、子どもたちの中にも、私立の小学校の入試など厳しい現実が潜んでいるのかも知れないが、そう思いたくないというのが多くの人がいだく感情ではなからう

か。

そのような感情があったから、長い間、幼稚園は聖域を保ってこられたというのも、事実には違いない。

教育に関してやかましく論じる人々の多くも、何となく幼児教育に関しては発言を控えがちである。

「まあ幼稚園時代は良いが、小学校からは」式の考えを、表に出さなくても内心に潜めている人が多い。

このことは、幼児教育にとって一つの救いであったようにも思われる。それで、比較的のびのびとした保育がなされているようである。先生方も、小・中・高校のように、きっちりしたカリキュラムに悩

まされることもなく、何よりも幼児と遊ぶことに心を傾けられたのであろう。

しかし、残念なことに、その聖域はしだいに侵されつつあるように思われる。学歴偏重の競争社会の原理が、年と共に下向しつつあり、「幼稚園では遅過ぎる」という発言さえ生じている。子どもの生活も、様々なおけいこ事などに追われ、妙に忙しくなっている。「そんなに早くから子どもの進路を決めなくも」と思っても、母親の意識は、「その方が安心です」に傾くらしい。極端な場合には、「幼稚園で十分遊んだから、後はしっかりと勉強しましょう」という母親もあると聞く。

「それでは子どもがかわいそうだ」というのは、大部分の幼稚園の先生方が感じられているであろう。どうしたら、この風潮を止められるかを、真剣に考えなければならぬ事態になっている。もちろん、その責任は、幼稚園にあるのではなく、わが国

の社会全体、あるいは公教育への不信感などが大きく影響している。といって、幼児教育の手をこまねいていてすむわけでもない。

では、幼児教育でなすべきことは何だろうか。まず気がつくのは、「聖域や伝統の中に安住しない」ことである。今までの教育の中で、何が変わらなくて良いか、どこは変えなければならぬかを、もう一度検討してみることが必要であろう。たとえば、旧暦に従った伝統行事をどこまで残すべきだろうか。保育の柱となる「遊び」とは、何なのだろうか。幼稚園で身近にやっていることを、改めて考え直すことがその出発点であろう。

「そんなことは、いわれなくてもやっています」と多くの幼児教育関係者から反発されることを期待する。その反発があれば、新しい意味での聖域は安泰であるに違いない。

(お茶の水女子大学学長)